

第15回神奈川産学チャレンジプログラム 最優秀賞に経営・新藤チーム

神奈川県内の企業や団体が抱える経営課題に、大学生が解決策を提案する産学連携の課題解決型コンペ「第15回神奈川産学チャレンジプログラム」(一般社団法人神奈川経済同友会主催)で、専大からは最優秀賞に1チーム、優秀賞に11チームが選ばれた(別表参照)。今回は35企業から37チームが提示され、20大学235チームが参加。12月18日、横浜市のパシフィコ横浜で表彰式が行われ、賞状が手渡された。

賞	学部	メンバー(敬称略。全員3年次。先頭が代表)	所属ゼミ
最優秀賞	経営	新藤理央 笹谷穂乃花 山越春香 足立百合香	関根純
	経営	太田憲一朗 永作花香 中尾江里奈 佐竹海音 坂坂包実 内藤優太 大島美波 田中紋佳 小山礼仁 豊川穂高 木村龍登	関根純 馬場杉夫
優秀賞	経営	伊井隼也 近松陸人 加藤玲奈 鈴木里菜 山田竜輝 岡田大河	福原康司
	経営	斎藤涼 西川玲奈 松原朋也 栗原百香	間嶋崇
商	商	鶴岡みさき 鈴木優誠 山本晏史 森内優芽 平方太郎 阿部裕人 西村光生	石川和男
	商	権守星南 高岡奈未 小野瑞稀 佐伯華乃	鹿住倫世
	商	青木真美 松野さゆり 木村まりあ 服部小百合 栗原敬之 川口泰礼 山口里沙	高橋義仁

アプリ「なびきゅん」を考案

話し合う大切さ実感

最優秀賞を受賞した新藤理央さん、笹谷穂乃花さん、山越春香さん、足立百合香さんのチームは、京急グループが販売する乗車券、グルメ、レニング、音声AR(拡張現実)による名所紹介、飲食店の混雑状況が確認できるシステムの三つを組み込んだアプリをプレゼンテーション。新藤さんは「自分たちに身近なスマートフォンを活用したアプリを考えるのは楽しく、自由な発想で取り組むことができた。」

張現実)による名所紹介、飲食店の混雑状況が確認できるシステムの三つを組み込んだアプリをプレゼンテーション。新藤さんは「自分たちに身近なスマートフォンを活用したアプリを考えるのは楽しく、自由な発想で取り組むことができた。」



賞状を手に笑顔の新藤チームと関根教授(右)

「4人がそろって機会が少なく、情報の共有が大変だった」と新藤さん。2人でも集まれる日は作業を進め、全員が集まれる日は納得できるまで議論し、「話し合うことの大切さを実感した。関根教授からは『自分たちの意見だけでなく、周りからアドバイスをもっと改善していくことが大切だ』と普段から言われていた。今回の提案でも先生や友人に発表を聞いてもらい、反省点をフィードバックすることで信頼性が増した」と話した。

学生有志による大学生意識調査プロジェクト(主催川公益社団法人東京広告協会)に参加した。参加したのは香取さん、中野将太郎さん、戸城智也さん、石巻専修大学の千葉雄大さん。4人は約8カ月にわたって他大学の学生とともに活動。「人間関係とキヤラクター」をテーマに大学生約1000人を対象としたアンケートを実施し、集計や分析を行った。11月30日には、東京・電通銀座ビルで記者発表会に参加した。

昨年4月から5カ月間、石巻専大からの国内留学生として石巻ゼミで学んだ千葉さんは、留学が終わった9月以降はオンラインで石巻から発表資料の作成などに携わった。発表会ではパワーポイントの操作を担当。「プロジェクトに参加したことで、以前よりも積極的に自分の意見を言えるようになった。モチベーションが高まった」と話した。千葉さんは「学生広告論文賞」にも参加した。

香取チームが銅賞

経営・石巻ゼミ「学生広告論文賞」

経営学部・石巻ゼミで、学生は広告が持つ役割の3年次生チームが、日本広告学会関東部会主催の第6回「学生広告論文賞」で銅賞を獲得。1月29日、都内で表彰式があった。

香取チームの論文は「キュレーションメディアのコンテンツと広告との運動性は消費者評価にどう影響するのか」。イ

ンターネット上の情報まとめサイトであるキュレーションメディアとネット広告の関連性について明らかにし、効果的な広告掲載法を提案した。学生約200人に調査を行

った結果、まとめサイトと広告の内容に連動性があるものの方がより効果があると結論付けた。審査では、キュレーションメディアという新しい分野にチャレンジしたこと、分析がよくまとまっていたことなどに高い評価が集った。

表彰式で香取さんは「キュレーションメディアと広告についての研究実例がこれまで少なく、どのように進めていった

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

経営学部・石巻ゼミで、学生は広告が持つ役割の3年次生チームが、日本広告学会関東部会主催の第6回「学生広告論文賞」で銅賞を獲得。1月29日、都内で表彰式があった。

香取チームの論文は「キュレーションメディアのコンテンツと広告との運動性は消費者評価にどう影響するのか」。イ

ンターネット上の情報まとめサイトであるキュレーションメディアとネット広告の関連性について明らかにし、効果的な広告掲載法を提案した。学生約200人に調査を行

った結果、まとめサイトと広告の内容に連動性があるものの方がより効果があると結論付けた。審査では、キュレーションメディアという新しい分野にチャレンジしたこと、分析がよくまとまっていたことなどに高い評価が集った。

表彰式で香取さんは「キュレーションメディアと広告についての研究実例がこれまで少なく、どのように進めていった

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。



表彰式で小林さん、大木さん、香取さん、坂本さん、櫻井さん(左から)

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

た」と振り返った。この論文コンクールに石巻ゼミからほかに3年次生2チームが参加し、奨励賞に入った。

らいいのか試行錯誤した。論文の方向性などを仲間と議論してゼミで発表し、石巻先生からアドバイスしてもらい、その積み重ねが論文に生き

東京ドームに 新規事業提案

経営・合同授業最終報告会

経営学部の学生が、(株)東京ドームの協力で新規事業の立案に挑んだ。1月10日、生田キャンパスで最終報告会があり、同

社に対してプレゼンテーションを行った。この取り組みは、見山謙一郎特任教授(ベンチャー創造と事業継承特

講)と三宅秀道准教授(ベンチャー・ビジネス論)の合同授業として、昨年9月にスタートした。受講生は2年次生から4年次生の約60人。

授業は5人1組で東京ドームシティ(東京都文京区)を視察し、同社の強みなどを分析し事業企画を起案。予選を経て、5チームが同社に提案す

ることになった。三宅クラスからは、東京ドームで開催されている野球塾に通う子どもの親をターゲットに競技力向上のための食の知識を学んでもらおうというも

講)と三宅秀道准教授(ベンチャー・ビジネス論)の合同授業として、昨年9月にスタートした。受講生は2年次生から4年次生の約60人。

授業は5人1組で東京ドームシティ(東京都文京区)を視察し、同社の強みなどを分析し事業企画を起案。予選を経て、5チームが同社に提案す

ることになった。三宅クラスからは、東京ドームで開催されている野球塾に通う子どもの親をターゲットに競技力向上のための食の知識を学んでもらおうというも

講)と三宅秀道准教授(ベンチャー・ビジネス論)の合同授業として、昨年9月にスタートした。受講生は2年次生から4年次生の約60人。



新規事業を提案する学生

講)と三宅秀道准教授(ベンチャー・ビジネス論)の合同授業として、昨年9月にスタートした。受講生は2年次生から4年次生の約60人。

授業は5人1組で東京ドームシティ(東京都文京区)を視察し、同社の強みなどを分析し事業企画を起案。予選を経て、5チームが同社に提案す

ることになった。三宅クラスからは、東京ドームで開催されている野球塾に通う子どもの親をターゲットに競技力向上のための食の知識を学んでもらおうというも

講)と三宅秀道准教授(ベンチャー・ビジネス論)の合同授業として、昨年9月にスタートした。受講生は2年次生から4年次生の約60人。



大久保 謙 文学部教授

村上春樹の短編『神の子もたちはみな踊る』の英訳題はAll god's children can danceだ。もちろん間違っていないのだが、村上の短編のタイトルはもともとスタンダードナンバー「All God's Chillun Got Rhythm」の日本語タイトルを借用したものである。つまり、英語の曲の題名を訳した日本語の題名を再び英訳し直すと、元の英語タイトルとはずいぶん違うものになってしまったわけだ。

言語を、いわば「訳し戻す」際に、こうしたズレが生じるのは面白い。このズレを主題にしたのが清水義範の『スノー・カントリー』。英語の小説を翻訳せよ、という高校の課題に、一人の生徒がヤーサンアリ・クーワッタの『スノー・カントリー』を選

ぶ。川端康成『雪国』の英訳を、それとは知らず日本語に翻訳したわけだ。当然、川端の原文とは似ても似つかぬ代物が生まれる。

だが、翻訳を繰り返すことによって生じる原文とのズレは、創造的に働くこともある。

アメリカの文芸誌McSWEENEY'Sでは、さまざまな言語で書かれた短編を、複数の言語で次々に翻訳していくという実験がなされた。例えばデンマーク語の短編が英訳され、蘭訳され、英訳され、仏訳され、英訳され、最後にスウェーデン語に訳される。三つの英訳がそれぞれ全く違うのも面白い。

18の言語が自由に飛び交うこの雑誌を眺めていると、異文化や翻訳に関する思い込みが解きほぐされていくようだ。(担当は英米の小説) ※短縮版。全文はCALL教室ホームページで。

翻訳の事情あるいは二乗